WASEDA University

Smart SE

ＤＸコース　修了制作

業務改善のプロフェッショナル育成
～DX BOOT CAMP 実践型人材の創出～

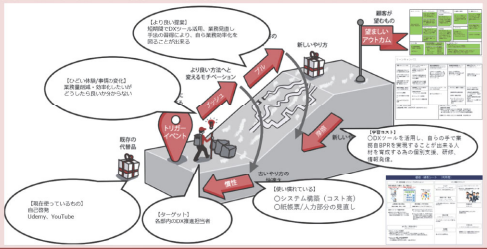
sdx02-027　村山亮介 transient.happiness.0706@gmail.com

デジタル人材育成における課題

- ✓ 現在提供している教育プログラムは、終日×複数日のカリキュラムとなっており、業務調整がうまくいかず**参加機会**を得られていない社員が多い
- ✓ 現在提供している教育プログラムは**座学中心**のため、教育プログラム中に実際にデジタルツールを活用して何か実践的なものを作る機会がなく、教育プログラム終了後に実際に試してみて躓く参加者が多い
- ✓ 現在提供している教育プログラムは、デジタルツール活用に重きをおいたプログラムであるにもかかわらず、教育プログラム後に**業務改善**を行う具体的なイメージが湧きにくく、技術力向上および定着に寄与できていない
- ✓ 当社社員が抱える銀行業務の中には、各種法規制に遵守するために何年も前に構築された仕組みが改善されず、**非効率な業務**がコスト増に繋がっている

課題に対する解決策案

- ✓ 業務改善・効率化に直結した教育プログラムが、当社の競争力を加速させる



解決策に対するニーズ・カリキュラム・効果の仮説検証

①社員ニーズの調査

■ 仮説
- ✓ 現在提供している教育プログラムは、終日×複数日のカリキュラムとなっており、業務調整がうまくいかず参加機会を得られていない社員が多い

■ 検証方法
- ✓ 当社全体のDX推進を担う部署の有識者へ、ヒアリングを実施
- ✓ 事業部・部に1名ずつ任命されているDX推進担当者約300名へ、社内アンケート調査実施

■ 検証結果
- ✓ 終日業務調整が必要なカリキュラムは、業務調整が難しい
- ✓ 半日業務調整が必要なカリキュラムであれば、終日に比べると業務調整がしやすい

■ 検証による学習
- ✓ 終日×複数日のカリキュラムをやめて、**半日×複数日**のカリキュラムで教育プログラムを企画すると、改善が見込めそうということが分かった

②プログラムニーズの調査

■ 仮説
- ✓ 現在提供している教育プログラム（ローコードツール（Power Platform）の活用）は座学中心
  →教育プログラム中に実際にローコードツール（Power Platform）を活用して何か実践的なものを作る機会がなく、教育プログラム終了後に実際に試してみて躓く参加者が多い

■ 検証方法
- ✓ 2023年11月22日（水）および12月01日（金）にそれぞれ開催した教育プログラム「ローコードツール（Power Platform）の活用」参加者計1,000人に、アンケート調査実施

■ 検証結果

No.	今後どのような研修を望むか（研修式/教育回数）	回答数
1	仕事用ロボット（例：定型・反復ルーズな工作などの実験できる）	113
2	業務利用可能なアプリ作成(Power Apps編)	105
3	業務利用可能な自動化フロー作成(Power Automate編)	95
4	業務利用可能なDashboard(ビジネス作成 (Dashboard Online編)	67
5	その他	7

■ 検証による学習
- ✓ ツールを活用して**実効の業務をその場で改善**できる教育プログラムの方が、座学中心に比べて、ツールをどう活用すればよいかが分かって楽しい、というニーズがあることが分かった

③カリキュラムの工夫による改善定着度調査

■ 仮説
- ✓ 教育プログラム中に実際にローコードツール（Power Platform）を活用して何か実践的なものを作るカリキュラムが、技術力向上および定着に寄与できる

■ 検証方法
- ✓ 2023年04月以降着任した非IT部門からの異動者計6名に対し、実践的なものを作るカリキュラムを実施し、その後の改善状況をウォッチ

■ 検証結果
- ✓ カリキュラム内で提示した汎用的なサンプルだけでは、その後の業務改善につながらなかった
- ✓ 参加者が関わる業務をテーマにカリキュラム内で作るようにしたところ、その後も自身で継続的に業務を改善するようになった

■ 検証による学習
- ✓ 参加者が自分事としてとらえられる業務を例に、実践的なものをカリキュラムにすることで、その後も自身で継続的に改善に取り組むきっかけ作りができることが分かった

④コスト削減実績の調査

■ 仮説
- ✓ 当社社員が抱える銀行業務の中には、各種法規制に遵守するために何年も前に構築された仕組みが改善されず、**非効率な業務**がコスト増に繋がっている
  →非効率な業務に対して継続的な業務改善を各部署で実施されることで、コスト削減に繋がる

■ 検証方法
- ✓ 実践的なものを作るカリキュラムで「月次定例MTG前日に会議資料入力を依頼するOutlookメールをPower Automateにて自動化」し、その後のコスト削減状況をウォッチ

■ 検証結果
- ✓ 1回当たりの業務削減時間は▲2分、年間業務削減時間は最低180時間

■ 検証による学習
- ✓ 受講生30名、講師6名で実践的なものを作るカリキュラムを実施した場合、開催コスト約6百万円に対し、年間業務削減コストは▲約15.4百万円となり
  ▲約10百万円のコスト削減が見込めることが分かった

仮説検証時の成果

■ コスト削減効果の内訳

【コスト】

No.	参加者	教育プログラム	①人数	②教育プログラム時間	③合計（=①×②）	④平均時給	⑤合計（=③×④）
1	受講生	基礎教育プログラム	30人	16時間	480時間	2,858円	1,371,840円
2		実践教育プログラム		40時間	1,200時間		3,429,600円
3	講師	基礎教育プログラム	6人	16時間	96時間		274,368円
4		実践教育プログラム		40時間	240時間		685,920円
5		教育プログラム準備/資料作成		10時間	60時間		171,480円
6		合計	36人		2,076時間		5,933,208円

▲10百万円

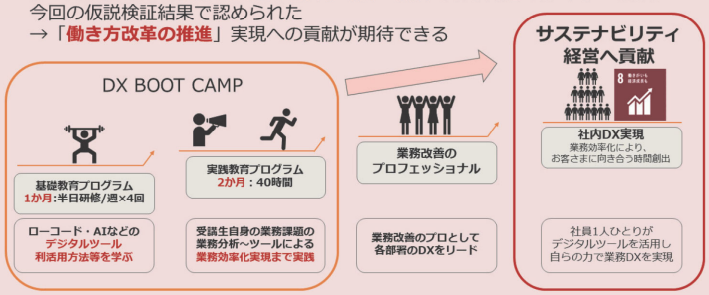
【効果】

No.	参加者	教育プログラム	①人数	②1人当たりの年間業務削減時間	③合計（=①×②）	④平均時給	⑤合計（=③×④）
1	受講生	実践教育プログラム	30人	▲180時間	▲5,400時間	2,858円	▲15,433,200円

育成コストより**業務改善によるコスト削減が上回った**

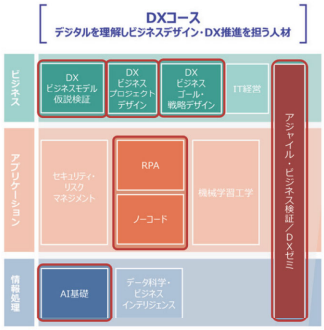
解決策のブラッシュアップ

■ 当社社員が自身の手でDXを行い、**業務効率化**を図ることで**コスト削減**に繋がり、浮いた業務時間を**お客さまに向き合う時間へ転換**できる見込みがあることが、今回の仮説検証結果で認められた
→「**働き方改革の推進**」実現への貢献が期待できる



DXコース期間中に６人が**業務改善を実践し貢献**

DXコースで学んだこと



DXゼミ
- ✓ 仮説検証を実際に実施し、ディスカッションを重ねていくことで、自分が目指すビジネスの展望が明確化され、第三者を巻き込んで洗練させていくことの重要さを学ぶ
- ✓ 加えて、先生や仲間と切磋琢磨して成果物を作り上げていく、「DXゼミ」の要素は私が考えるDX BOOT CAMPに取り込みたい

DXビジネスモデル仮説検証、DXビジネスプロジェクトデザイン、DXビジネスゴール・戦略デザイン、アジャイル・ビジネス検証
- ✓ リーンキャンバス、顧客フォースモデルなどの作成を通して、モデルの可視化および共有の重要性を学んだ
- ✓ 課題の発見、仮説設定、提供価値に論理矛盾が発生していないかを確認すること、および仮説検証フィードバックサイクルを何度も回すことの重要性を学んだ

ノーコード、RPA、 AI基礎
- ✓ Power PlatformやAI・RPAなどのツール利用により業務効率化を図れることは実務や演習を通して理解した
- ✓ 加えて、いざ他の人に伝播し、活用出来るレベルに引き上げるためには、具体的に何をすればよいかが学べた

今後の計画と期待

■ DX BOOT CAMPの来年度開催実現のため、引き続き社内で強く推進していく
- ✓ 興味のある方は是非ご協力いただきたい

■ 当社教育プログラムを取り纏める部署に本件提案
当社課題解決に向けた良い打ち手であると賛同を得て、**来年度人材育成プログラムへの採択決定**

■ 2024年７月開催に向けて、教育プログラムを持つIT企業へのインタビュー・協働により、カリキュラム内容を精査・ブラッシュアップ

■ 第1回終了後、受講生の卒業制作物を社内DXの好事例として社内外に積極的に発信し、社員一人ひとりが自らの手でDXを行うというカルチャーを醸成していく

【今後のスケジュールイメージ】

2023年度	2024年度	
2-3月	4-6月	7-9月
協働体制構築	教育プログラム準備・ブラッシュアップ	第1回 DX BOOT CAMP開催

来年度DX人材育成プログラム**採択正式決定**

スマートエスイー：スマートシステム＆サービスおよびDX推進を担う人材の産学連携育成